



センバあいつ!! 私、身体が男になっちゃったんですけどぉ!?

B:side

⑥ ごちゅうい ⑥

このおはなしは架空のもので
実際のもろもろとは関係ありませんよ



登場しているひとは
みんな18歳以上ですよ



危ないかもしれませんので
おはなしの中でしていることを
真似したりしないでくださいね

💧 センバぁイっ!! 私、身体が男に
なっちゃったんですけどぉ!? 💧

⑥ 登場人物 ⑥

日南 穂／香
(ひなみ ほのか)

身体が男になっちゃった女の子
お気楽な性分で身体の変化についても
さほど深刻に考えていないが
性欲が強くムラムラするので
親しい男子であるレンに相談する

水樹 レン
(みずき れん)

穂／香の幼馴染で一年先輩の男子
頼まれるとイヤとは言えず
穂／香の性欲解消のために一肌脱ぐ(?)

センバぁイっ!! 私、身体が男に
なっちゃったんですけどぉ!!



「センパイっ! 私...男になっちゃったんですっ!」

...と、ウチの玄関でいきなり脱ぎだした彼女は
一年後輩で隣に住む穂／香（ほのか）

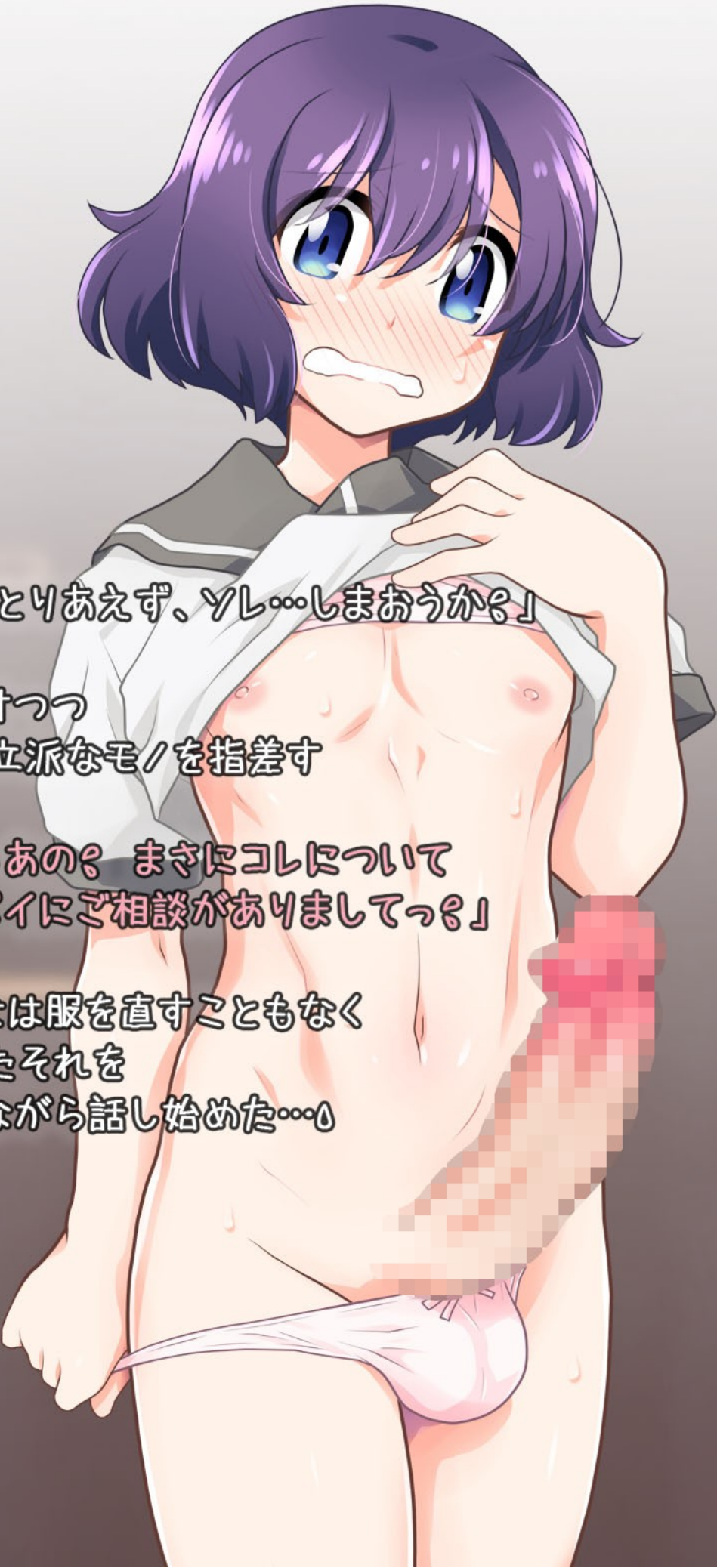
もちろん女子...のはずなのだが...



...このぺったんこの胸板と股間の毛ノは
確かにどうみても男のものだ

(...まあ胸については
もともと平た...いやいやそれはともかくo)

男の体とはいえ裸を見せつけられて
目のやり場に困る...o

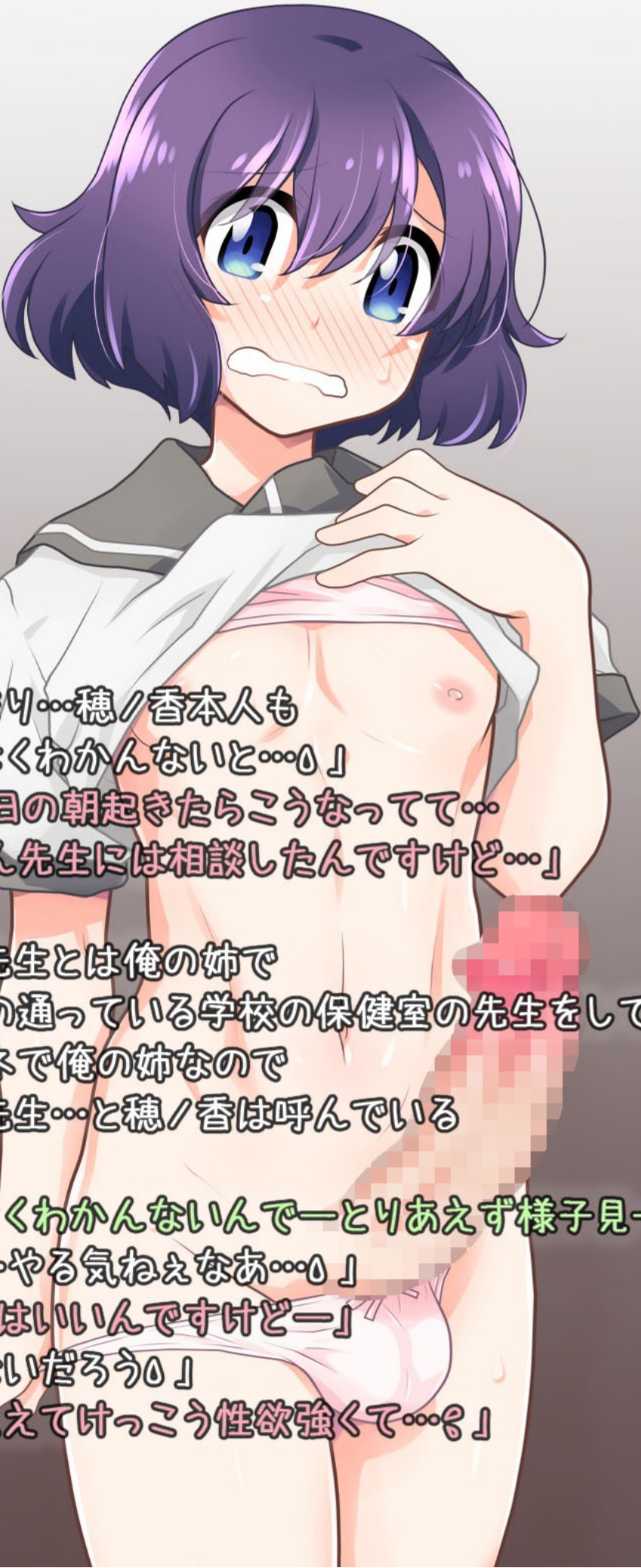


「ととととりあえず、ソレ…しまおうか？」

目を背けつつ
彼女の立派な毛ノを指差す

「いえっあの？ まさにコレについて
センパイにご相談がありましてっ？」

と、彼女は服を直すこともなく
勃起したそれを
揺らしながら話し始めた…。



「…まあつまり…穂／香本人も
なんだかよくわかんないと…」
「はい、昨日の朝起きたらこうなってて…
アネちゃん先生には相談したんですけど…」

アネちゃん先生とは俺の姉で
俺と穂／香の通っている学校の保健室の先生をしている
名前がアカネで俺の姉なので
アネちゃん先生…と穂／香は呼んでいる

「『んあーよくわかんないんでーとりあえず様子見ー』って…」
「姉ちゃん…やる気ねえなあ…」
「まあ、それはいいんですけどー」
「…よくはないだろう」
「私…こう見えてけっこう性欲強くて…」
「…は？」



「いえその、↓このとおり...このコゝ
けっこう主張するじゃないですか？」
「ああ...まあこのサイズじゃあね！」

びくんっどと跳ねる穂ノ香の毛ノは
まさに立派と言えるもので
俺の毛ノはもちろん比べ物にならないレベル！

エロ漫画とかの巨根じゃないかというサイズで...

正直同性ながら惚れ惚れしてしまう！



「なんで鎮めようと思って
自分でシコシコ³したりしたんですけど
まあ…物足りなくてo」

穂ノ香がこの立派モノをしごいて
オナニーしているところを想像して興奮…してしまうo
…それはそれでちょっと見たかったな…♡

「で、それもアネちゃん先生に相談したら
『レンくんを手伝ってもらってー』って」
「マ、マジか…」



っとスマホにメール…このタイミングは…姉ちゃんか…

☑『>ちゃんと抜いてあげてねー @アカネ』

… ダメ押しと…まあ昔から
逆らえないんだよな姉ちゃんには…

「はあ…の わかったよ、その…俺が手伝って…その…
しゃ、射精させればいいんだな？」

「はい… いいんですか？ 嬉しいですっぞ」
「おう…その、穂ノ香はいいのか？
形としては男同士ってことになるけど…の」
「あっそこはむしろウェルカムですっぞ
どちらかといえば腐ってる方ですからぞ」

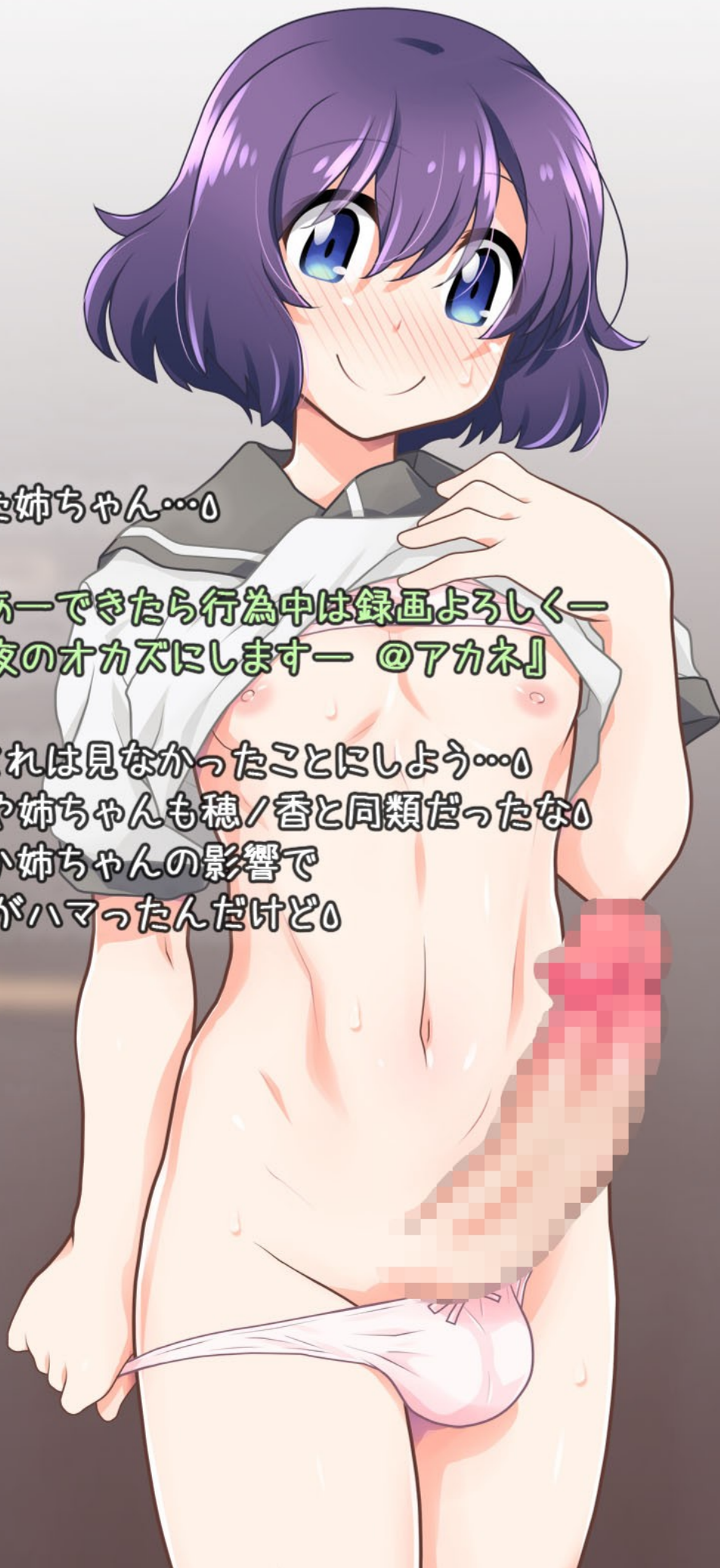
「あー…そういやそうだったね…の」
「ヘンな話、センパイと他の男子のカラミとか…
定番のオカズですし♡♡」
「ああうん…の 聞かなくてもよかったね…の」



っとまた姉ちゃん…。

☑『>あーできたら行為中は録画よろしくー
今夜のオカズにしますー @アカネ』

うん、これは見なかったことにしよう…。
そういや姉ちゃんも穂／香と同類だったな。
というか姉ちゃんの影響で
穂／香がハマったんだけど。



玄関やらリビングではなんなので
俺の部屋に行く

ちなみに両親は長期出張で
姉ちゃんと俺の二人暮らしのうえ
姉ちゃんも夜遅かったり
帰宅しなかったりが常なので
別にどこでもいいといえればいいのだが...



「あ、センパイも脱いでくださいねっ」
「え…まあいいけど…必要か？」

「だって私だけ裸も恥ずかしいじゃないですかっ？」
「…今更言うかそれ」
「ま…私も見たいですしっ センパイの裸っ」

というわけで既にほぼ裸の穂／香に合わせて俺も服を脱ぐ…
じっと見られてると脱ぎにくいんだが…
パンツを下ろして俺のモ／が飛び出すと
穂／香が「きゃっっ」っと嬉しそうな声をあげた



「あっ、なんだかんだ言ってセンパイも
勃起してるじゃないですかっ♡
…勃起…してるんですよね?」
「し、してるよ! 悪かったな小さくて?」

穂/香は無遠慮に俺の毛/をしげしげと眺める

「いえいえっ…思ったよりちょっと?小ぶりだったんで♡
…へえー? 皮もかぶっててなんだか可愛いですね♡」
「…可愛い、ね…」

…悪気はないんだろうが
まあ確かに穂/香の凶悪な毛/に比べれば可愛いだろうね…
標準以下(十包茎)だというのは自覚してるし…

「…ちょっと比べてみましょうよ♡ ほらほら?」

と、自分の毛/を突き出してくる

「あ、ああ…」

気は進まないが言われるままに向かい合って
穂／香のモ／に俺のモ／を並べる...

その差は歴然
俺のモ／は穂／香の三分の一程度しかない
まさに大人と子供...というか
それ以上だなこれ...o

「こう見ると...
私のって大きめですかね？」
「ん...か、かなりねo
俺のが小さい...かもだけどo」
「やっぱり可愛いですo
ショタキャラみたいでっo」
「って、おっおい...
そんなにくっつけるなよo」
「いいじゃないですか？
ほらほらo」



ぐいぐいとモ／を寄せて俺のモ／に密着させてくる
穂／香のモ／の熱さと硬さが…こ、心地よい

「こ、こんな熱いもんなんだな
すごい硬いし」
「センパイのだって
熱くて硬くなってますよ
ちっちゃいですけど」

ヤバい…
これだけでイっちゃいそうだな…
このまま続けて
射精してしまいたい気持ちを
なんとか抑えて
俺は穂／香を自室に引っ張る

「い、いいからっ …ほら、こっち来い」
「はーいっ♪」



「…じゃあ…に、握るぞ…？」
「はっはい…♡」





俺のモ／よりちょっと…
いや、ずっと…すごく大きい…
握り慣れたものと
同じ器官なのかと思うほど太く固い

「ふと…っ」

「んっ センパイの手、気持ちいい…っ…
自分で握るのとぜんぜん違う…♡」



「う、動かすぞ…」

「はいっ…♡ シ、シコシコして…っください♡」

サイズは全然違うものの
自分のモノと同じ要領でしごいてみる

「あっ♡ んっ…いいっ♡ さすがセンパイっ…
長年シコリ慣れてるだけありますね…っ♡」
「褒められてるのか…？ 他の男のをしごくなんて
初めてだけどな♡ こんな極太だし…♡」



「あんっ☆ センパイが他の男性にご奉仕手コキなんて
…想像するだけで興奮しちゃいますっ♡」
「想像するなよ…って、今まさにしてるわけだけど…」



「んっ☆ そうですね…んんっ☆ こ、興奮して…っあっ☆
すぐイキそうです…っ☆」
「〇 …ん…いいよイっても…」



男の体とはいえ
自分の愛撫で気持ちよくなってくれるのは
正直喜びを感じる

ビクビクを身体を震わせる穂／香を
絶頂させるために握りをきつくしながら手を早くして
特にカリ首あたりをきつく刺激する

「あっ☆ それっ…いいっ☆
センパイっ…いい、イッちやいそうですっ☆」

「イ…くっ♪ おっ♪ イクっ…イクっ♡♡」

びゅるるっ♪と穂／香が大量に射精する
宙に舞った精液は穂／香自身と俺の顔にまで降り注いだ



「おっ…おい穂／香っ…出しすぎ…っ」

「あっ ぁひっ んだってっ…」

センパイの手コキっ 良すぎっ んっうっ♡♡♡」



俺まで精液まみれになりながら
びゅるびゅると射精を続ける穂／香のちんぽをゆっくりしごく

「んっ…センパイ優しい…っ☆
出したあとのシコシコも気持ちいいです…っ♡」

「ああ…だんだん小さく…ならないな
というかガチガチじゃないか」
「ふふ☆ 一発くらいじゃ
小さくならないんですよこのコ☆」
「マジか…じゃあこのままもう一発？」
「はい…☆ でも…」



「センパイのそのコゑも…
気持ちよくなりたいんじゃないですか？
ちっちゃいけどびくん♪びくん♪ってしてて…♡♡♡」

精一杯勃起している
俺のモノを指差して微笑む

「あのっ…私もセンパイのっ…し、しごいていいですか？
センパイほど上手くないですけど♡」

「あ、ああ…でも…」

戸惑う俺を他所に
穂／香が俺のモ／に手を伸ばす



「やっぱり小さくて可愛いなあ…♡」

穂／香の指が優しく包皮につつまれた先端あたりをつまみ
皮を引き下げるように手を動かすと…



「あっゑ …っ…ああっ♡ゑ」

俺はそれだけで…びゅーっぞと
精液を迸らせてしまった
穂／香には負けるもののかなりの量だ

「きゃっゑ …えっ!?

センパイ…っ…出ちゃいました…?ゑ」

「んっ…ああっゑ く、急に触るから…っんんっ♡」

「ごめんなさい…でも、センパイ敏感なんですね…♡
ふふ： 触れただけでイっちゃいました?♡♡」

「ああ…情けない
…でも確かに…人にされるとぜんぜん違うんだな…♡」
「ですね♡ 自分の手よりずーっと気持ちいいです…♡♡♡」



出したばかりのちんぽを優しく指先で揉んでくれる
俺も穂／香のモ／をしごいてお返しする

「ん…ああ…っ♪ 穂／香の…ま、まだぜんぜん固いな…♡」

「うん…♡ あの、せんぱい…よかったら…
お、お口でして…みませんか？」

「く、口って…フェラ？」

「お、俺が穂／香のを…？？」

「はい…♪ 手でこんなに気持ちいいんですし
口ならもっと…かなって♪」



「私もセンパイの…してみたいですし♡
しゃぶりあいっこ…してみませんか?♡」

その穂ノ香の口にしゃぶられること
俺がこの巨根をくわえることを想像し…興奮した

「ん…う、うん…穂ノ香のなら…したいけど♡
…上手くできるかな?♡
したこともされたこともないし…♡」
「ふふ♡ だいじょうぶですよきっと…♡
お互い気持ちいいトコ♡知ってますしね♡」



穂／香のモ／を間近に見ると本当にデカイ…
タマも大きくてこれ以上ない男らしい部分だが
穂／香のモ／だと思えば不思議と愛おしく感じる…

さっき出したばかりだから濃厚な精液の匂いもまとっているが
それでも漂う雄の匂いは俺自身のものより強く感じる…

「ん…センパイのもまだ固い… やっぱり可愛いです♡
はあ…この匂いもやらしい…♡」

穂／香も俺のモ／に顔を寄せて…
クンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ、チュッチュとキスする

「んっ…え ああっえ」

「ふふ、さっきみたいにすぐ出しちゃダメですよお」

「今度は一緒にイきたいです♡」

「ああ…が、がんばるよ…え」

俺も穂／香の真似をして

穂／香の先端にチュッとキスし…

口を開けてその巨根をくわえた





「やば…♡ ちんぽしゃぶってるセンパイ…っ♡
超エロいです…♡♡ あと気持ちいい…っ♡」
「んぷっ…♡ ん、穂／香のっ…やっぱデカい…っ♡
すごく固い…♡」

つやつやに張り詰めた逞しい亀頭をしゃぶり、舐め回す
同じ男同士の毛／だというのに…惚れ惚れするし
味も匂いも愛おしい…♡

じゅぽ♡ じゅぽ♡ と音を立てて
夢中で穂／香の毛／を口愛撫する

「あんっ♡ センパイっ♡ そこっ…んんっ♡
わ、私も…っ…ちゅ♡ ちゅぽっ♡」



穂／香の唇が包皮を拵げ舌を差し込んで
舌先で裏筋やカリ裏を舐め回す

「あっ…んっ…穂／香っ…イっ…イッちゃうってっ…」

「んふふ…っ…ダメですっ…我慢してくださいっ…」

「んっ…うう…で、でも…っ…」

「もう…っ…じゃ、私になるべく早くイキますからっ…
協力してくださいねっ…」

「えっ…ああ…？」

腰を引いて…ずぶんっ…と俺の口に突き入れ…
そのままずっぽっ…ずっぽっ…とピストンを始めた



「んっ んぶっ... んん...っ」
「はあっ... センパイの口っ...
っ...ああ...っ 気持ちいいよお...」
「んんっ っ...っぶ んっ...んっ」

抜き差しされる穂／香の鈴口から
とろとろと先走りがあふれる
その粘りを舌先に絡め
その舌で出入りする先端を愛撫する

...口を犯されているだけなのに
俺は幸せと快感を感じていた



「ああっ…♡ も…すぐイキそう…っ♡ ん、っセンパイ…っ♡
射精して…いい? センパイの口の中にっ…♡
どぴゅっ♡ てして…いいですか…?♡」

「ん…っいいよ…♡ 飲む…っ♡ 飲むから…っああっ…♡
お、俺もイっ…イっちゃうっ…っ♡」
「はい…っ♡ 私も…センパイの精液♡ 飲みますっ♡
イッてっ♡ センパイも…一緒に♡
一緒に…射精っ♡ しょっ♡♡♡」

穂ノ香も俺のモノにしゃぶりつき包皮の中を舐め回す
俺も負けじと穂ノ香を吸い上げた



「イクっ…♡ んぶっ…♡ センパイっ…イ…っ♡
イクっ…♡ イクっイクっ♡♡♡」

「穂／香っ♡ んっ…んんっ…♡ おっ♡
俺もっ…♡ イ…っくっ…♡♡♡」

口の中のちんぽがぐっと太くなったかと思うと
先端から俺の喉にめがけて熱い精液が吐き出された
と同時に俺も穂／香の口の中に思い切り射精する



「んっ…♡ んんっ…♡ センパイっ…の…っ♡
出てるっ…♡ んくっ…♡♡」

「んぶ…っ♡ んっ…んくっ…♡
穂ノ香も…っ…♡ すご…♡♡」

自分でも不思議なほど自然に
穂ノ香の出した精液を飲んでいた
味も匂いもこれ以上なく
男臭いもののなのに快感すら感じた…♡
ゆっくりお互いのちんぽを
唇でしごきあって、精液を飲みあう…♡



「はあ…♡ センパイの精液…
やらしい味♡で美味しかったです…♡」
「ああ…穂/香のも…♡
すごく濃くて…美味しかったよ♡」

「ふふ♡ センパイったら精液飲んで美味しいなんて♡
実はもともと男同士が好き♡だったんじゃないですかぁ？♡」
「そ、そんなこと…？ んっ…ちゅ♡
でも…♡ ホントに美味しい…♡♡♡」
「んんっ♡ じゃあ…もっと飲みます？？」

と、ちんぽを見せつける穂／香
射精前と変わらずガチガチに勃起している…

「まだまだ出ますよーっ
センパイにしてみらうと…
すごくいっぱい出ちゃうみたいっ」
「…ははっ す、すごいね…っ」



…結局穂／香のモ／が萎えるまで
何発も手コキとフェラを繰り返し
イクたびに飲んだ。

精液でお腹いっぱいになったころ
やっと小さくなった穂／香のモ／は…
それはそれで可愛いと思ってしまった俺だった♡

…それでも俺のちんぽより
ずっと大きかったのは
軽くショックではあった。

。

。

。

「んっはあ☆ センパイの口っ…
今日も気持ちいいですっ♡」

ゆっくり腰を振って俺の口でちんぽをしごく

もう穂／香の腰振りも慣れたものだ…
俺の方も激しく突かれてもえずくことなく
しゃぶれるようになってしまった♡





あれから毎日、帰宅してから
数発抜いてやるのが日課になっていたが
それでも昼間に催してしまうことも多くそういうときは
こうやって休み時間にこっそり処理するようになった

今日も女子トイレの個室でこうしてフェラ抜きしている。

「んっ…ちゅ…しかし

ほんとに性欲強いんだな穂ノ香…」

「えへへ…でもセンパイがイケナイんですよお」

ほらこのセンパイのフェラ顔とか思いだしたら…んっ
すぐおっきしちゃうんですよっ」

「まったく…o どうせオナニーもしてるんだろ？」

「はいo いろいろ男子のオナニーを調べて

アナニーとかもしてみていますo あっo センパイはそういう…

お尻のオナニーはしてたりします？」

「おっお尻!?! いや…っ…えっと…o」

「あっo その反応は…してるんですねo

いやーんo えろっo」

「…o」

実のところ…もともと興味本位でちょっと弄ってはいいたんだが
穂ノ香のちんぽを見せられてから

指や太めのペンを挿れたりするようになってしまっているのだo

「えーどんな感じですか？ どのくらいの挿入りますか？
私、アネちゃん先生にもらったオモチャで試してますけど
そこそこ…ですよ」

「姉ちゃんそんなの渡してるのかよ…」

「お、俺もまだそんなに…だよ」

「じゃあじゃあ、今日帰ったら私がしてあげますよ」

「センパイのお尻を開発…♡ ぐふふ♡」

「マジか…」

「っと、それより早くイかないと…休み時間終わっちゃうぞ？」

「あっ？ そうそう…じゃあ激しくしますよー」

「ん…」

穂／香は俺の頭を掴んで、強く腰を突き出した

「はっ♡ はっ♡

いいっ…センパイのフェラ顔っ…♡」

「っぶ…ん♡ んんっ…♡♡」

穂／香はちんぽをしゃぶってる俺の顔に悦んでくれるので
見えやすいように顔をあげ

じゅぽ♡ じゅぽ♡と音をたててフェラする

…自分的には間抜けな顔をしてるんじゃないかと思うが…♡

潤んだ瞳で見下されるとたまらなくなってしまう♡♡

つつい既にガチガチに勃起した自分モ／を
ズボンの上から弄ってしまう…♡



「センパイも…っ☆ 勃起してくれてるんですね☆
フェラ顔見られて興奮するとか…っ♡♡♡」

俺の口の中を激しく前後する穂／香のちんぽを
きつく吸い上げ、カリ首や鈴口を狙って舌を絡ませる

「あっそれっ…っ☆ いいっ…も、イキそうっ…っ☆
精液っ…出ちゃうっ…っ☆」
「いいよ…穂／香の精液☆ …飲ませて…♡」
「はうう…っ☆ イ、イクっ…っ☆
飲んでっ…センパイっ…っ☆ 私の精液っ…飲んでっ☆」

とひとときわ膨らんだ穂／香のモ／が俺の喉に突き挿れられた

「はっで、出るっ…っ 精液っ
センパイの口にっ…んっううっ♡♡♡」

びゅるるっどくどくっと
俺の喉奥に熱い精液が吐き出される

「はっで…たっ…っ
気持ち…っ…いいっ…♡♡♡」





「ぶ…っぜ うぶ…っ♡ ん、んく…っ♡♡♡」

ゴクゴクと喉を鳴らして穂／香の出したものを飲む
穂／香の欲望の塊を飲ませられることに
俺はすっかり快感を感じるようになってしまっていた…
精飲だけで危うく絶頂してしまいそうになるほど…

「んっ…♡ あゑセンパイも…
出したいんじゃないですか？ それ…♡」

俺の膨らんだ股間を指差して微笑む

ギリギリ射精には至らなかったが
小さいながらもパンパンに勃起しているのはバレバレだった♡

「あ…ああ？ まあ…？」

「…あの…私のここ…ちんぽでイってみませんか？
ちんぽ同士でこすって…♡」

穂／香がイッたばかりのちんぽを突き出す

「ネットで見て興味あるんですけど…♡
どうですか？♡」

「い、いいけど…その…

俺、たぶんすぐ出ちゃうかも…？」

「いいですよ♡ 私出したばかりですし♡

…じゃ、ほらほら：センパイもちんぽ出してくださいっ！」

「お…おう…♡」

俺もズボンを脱いで勃起したモ／を取り出すと
すぐに穂／香が寄ってちんぽ同士をくっつけた

前にサイズ比べをしたときのように密着させてゆっくり動かす

「うーん♡ センパイのちんぽ気持ちいいです…♡」

「あっ…ああっ♡ 穂／香のも…っまだ硬い…♡」

「ん…ふふ♡ また硬く
なっちゃいそうです…♡」

俺も腰を動かして穂／香の
太い肉棒に擦りつける

穂／香の逞しいカリ首が
俺のモ／をグイグイと
力強く扱き上げてくる

「あっ…ああっ♡ ん、穂／香…っ
…も、もう♡ で、出ちゃいそう…っ♡」
「いいですよ…♡ センパイの精液♡
そのまま私のちんぽにどぴゅっ♡って
ぶっかけてください♡」

「んっああっ♡ イ…イクっ♡
…でっ…出るっ♡♡♡」

「ううっ☆ …ああっ☆ で、出ちゃったっ…っ☆」

びゅるる☆びゅるる☆と穂／香のちんぽに向かって
放出してしまった☆

「ん…ふふ☆ センパイの熱い…☆
ちんぽ同士でイッちゃいましたね☆」

「ああ…ごめん☆
やっぱりすぐ出ちゃって…☆」

「ううん、私のちんぽで
イッてくれて嬉しいです☆
…ほら、センパイの精液で
ヌルヌルですよお☆」

穂／香のちんぽから下腹部まで
べったりと俺の精液が飛び散った…☆

「ん…☆ 気持ちいいです☆
センパイのやらしい汁…♡♡♡」

指先で俺の精液をちんぽに
塗り広げる穂／香…エロい♡



「でもこれじゃパンツ履けませんから…
きれいにしてくださいね♡ …センパイの口で♡」
「…えっ」

自分の精液まみれの巨根を鼻先に突き出され…
お掃除フェラさせられたっ

「あん…♡ どうですか？ 自分の精液の味…♡」
「どうって…っ 穂／香の方が美味しいかなっ
…でも…興奮するかも♡」
「ですよ？ ♪ 私も自分の飲むと興奮しますっ♡」

うーん、いつも自分の飲んでるのかな？っ

・

飛び散った精液を舐め清めたころには
とっくに授業は始まっていた…っ

どうせだからと再び勃起してしまった穂／香のモ／を
もう一発フェラ抜きした…っ

・

・

・

家に帰るやいなや服を脱ぎ俺を押し倒すと
穂／香は仰向けの俺に逆向きに跨った。

「んふふ さ、見せてください
センパイのやらしい穴♡♡♡」
「お…おう…」

素直に足を広げて
恥ずかしいその部分を晒す…と
同じように穂／香の股間が
俺の目の前に晒されているのだが
本人は気づいていないのか
わざとなのか…。





鼻先にぶるんっゝと重そうな玉袋が揺れその向こうには
きゅっと窄まった可愛らしい薄桃色の尻穴

そして俺の胸には逞しい肉棒が
ずしりと載せられている

「ふふ…センパイのお尻
可愛いです じゅるり」
「さ、さすがに
恥ずかしいんだけど…」

「大丈夫ですよぉ お…男同士じゃないですか…っ」
「たぶん男同士のほうが恥ずかしいからね…これ」
…って、んんっ」

穂ノ香が指で俺のアナルを弄る…周囲をなぞり
つぶと少し押し込んで確かめる

「あっ…ああっ んん…っ」
「ふふ柔らかい…っ んん…センパイ
けっこう遊んでるんじゃないですかぁ？ コレっ」



「そんなこと…っ？ あっ…あんんっ♡」
「やらしー声♡ ほら、指二本なんてカンタンに
入っちゃうじゃないですか♡
これセンパイのちんぽくらいなら
スンナリ入っちゃうカンジですよぉ？」

穂／香の指が俺の中をズブズブと前後する
いつの間にか指は二本から三本に増やされていた♡

「うわー♡ これもうほとんどおマンコ♡じゃないですか？♡
っておマンコに挿れたことないですけど♡♡♡」





「そんな…っ動かしたらっ…っ んっ…んあ…っっ」
「けっこう太いのいけちゃいそうですねっ
そうですねー…これいってみます？」

持ってきたポーチの中にいくつもあるディルドの中から
穂／香が選んで差し出したモ／は…中でもかなり太い方
穂／香の巨根より少し細い程度だ

…ていうかこれ姉ちゃんの私物…？

「むっ…無理だろそんな…？」
「いやいやきっといけますって？
たぶん絶対？」

そんな穂／香の根拠のない断定で
選んだディルドに手早くローションを絡め
その先端を俺のアナルに押し当てて…

「むっ…むり…え っ…んあ…あああっど…んんっ♡♡」

明らかに太いのがわかるディルドの先端が
押し付けられぐっと押し込まれる

「ん…っ…あっほらど 入っちゃいましたよど
ほらずぶずぶーってど」

「ああっど ん、は、入ってるっ…♡
俺の…中にっ…♡♡」



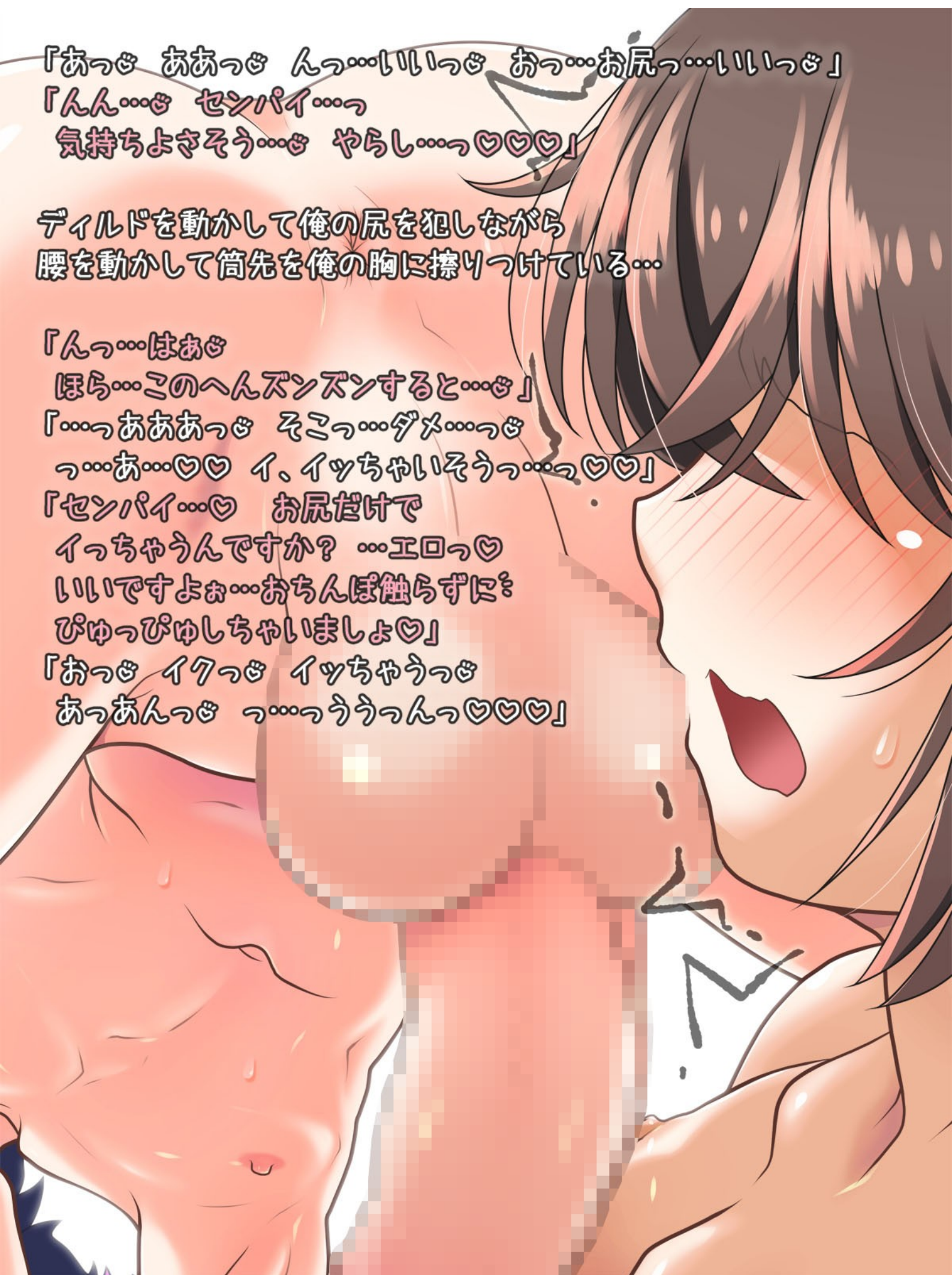
「ん…動かしますね…♡ ほら…センパイ…自分のより
ずっとおっきいちんぽ♡にズコズコされてますよ♡」
「こ…んな太い…ち、ちんぽ…♡
は、はいってるっ…俺の中あ…♡♡♡」
「んっ…はあ♡ センパイのケツ穴あ♡…エロおい…♡」



「あっ☆ ああっ☆ んっ…いいっ☆ おっ…お尻っ…いいっ☆」
「んん…☆ センパイ…っ
気持ちよさそう…☆ やらし…っ♡♡♡」

ディルドを動かして俺の尻を犯しながら
腰を動かして筒先を俺の胸に擦りつけている…

「んっ…はあ☆
ほら…このへんズンズンすると…☆」
「…っあああっ☆ そこっ…ダメ…っ☆
っ…あ…♡♡ イ、イツちやいそうっ…っ♡♡」
「センパイ…♡ お尻だけで
イっちやうんですか？ …エロっ♡
いいですよお…おちんぽ触らずにঃ
ぴゅっぴゅしちやいましよ♡」
「おっ☆ イクっ☆ イツちやうっ☆
あっあんっ☆ っ…っううっんっ♡♡♡」



「きゃっ☆ んっ…ふふっ☆
私のちんぽ…センパイの精液でヌルヌルになっちゃっ☆」

そう言いながらも穂／香は俺を突く手を動かし続ける

「んあっ☆ 穂／香っ…もっ…もういったからっ…☆
んっ☆ 止めっ…ああっ☆」

「このまま…もう一発イっちゃいましょうよ☆
センパイだってホントは
もっとイきたいんでしょ?」



「ああんっ♪ でもっ…んっ…♀

いっ…ああ…っ♪ 感じすぎっ…っ♪」

「はあ…悶えるセンパイ、エロ…♪ …ね、これなら…

私のち…ちんぽも入りそうですよね…♡」

「ほ、穂／香のっ…♀ 穂／香のを…俺に…♀

そ、それっってもう…セっ…セックス…♪」

「はい…セックス♪です♡

男同士ですから…ホモセックス♪ですね…♡」



「…私、挿れたいです…♡ センパイの…ここに♡
挿れてこんなふうにズコズコ♡したいです♡
センパイは…どうですか？」
「おっ…俺はっ…？」

今挿れられているのが穂／香のちんぽだったら…
それは穂／香に生えたちんぽを見た時から
本当はずっと俺が望んでいたことだと気づいた

「俺も…挿れられたいっ♡ 穂／香にアナル…っ…掘られたいっ♡
挿れてっ♡ 穂／香のちんぽっ…♡」

そう答えながら、俺は再びアナルで絶頂していた…



「ふふっ☆ 2回も射精しちゃったのに
珍しくまだガキガキじゃないですか☆
そんなに欲しいんですか？ 私のこれ…♡」

俺の精液で濡れたちんぽを
俺の硬さを確かめるように押し付ける
穂／香の力強いモ／がぐりっぐりっと擦り付けられ
玉袋同士も溶け合うように触れ合う

お互いのちんぽが絡み合って…
さらに興奮する…

「ああ…穂／香のだって…☆
すごく熱くて逞しい…☆」
「うん…☆ 私もはやく
センパイの中に挿れたいから…♡」
「んんっ…☆ 穂／香のちんぽ…っ☆
気持ちいい…♡♡」



ずっとこうしてちんぽ同士でイチャイチャしていたい…♡
でも、それ以上にこの穂／香の太いモ／で繋がりたい♡

「い、挿れて…♡ 穂／香…♡
穂／香のこれ…ちんぽ♡
俺に挿れて…♡♡」
「ふふ♡♡ センパイ…男なのに…
男とセックス♡したいんですね♡♡」
「ああっ♡ …言うなよ…♡♡♡
ん…うん…♡ そう…
男とセックス…っ♡ したい♡♡♡」
「ん…♡ よく言えました♡
じゃ…センパイ…♡
挿れますよお…♡」

穂／香の逞しい亀頭が俺の窄まりに触れ
ぐぐっと拡張ながら押し込まれる…



「ああっ…穂／香の…っ♡ 入って来るっ♡」

「んっ…センパイのケツ穴あ♡

キツ…っ♡ だ、大丈夫ですか？♡」

「う、うんっ♡大丈夫…

穂／香のに括げられてる…♡ 嬉しいよ♡」

「センパイ♡♡ んっ…あっ…ああんっ♡」

ぬぶんっ♡と穂／香の広がったカリ首が俺の中に入った
そのままゆっくり肉棒の胴の部分が収められていく…

「ああ…んっ♡ すご…やっぱり…

さっきのオモチャよりずっと太い♡」

「もうちょっと…♡ ぜんぶ…入りますよセンパイっ♡

ん…はい…ったっ♡」

穂／香の腰が俺の尻に密着し

穂／香の巨根がすべて俺の中に入ったのがわかった

「んんっ♡ ほら…っ♡
入っちゃいましたよ…っ♡
センパイとホモセックス♡
しちゃいました♡」

「う…っんん♡ ああ…穂／香の…っ♡
…お腹の中にある…っ♡」

「はいっ♡ センパイと…繋がってます…っ♡

ああ…っ…センパイの処女穴…っキツっ♡」

「ああ…穂／香の太すぎてパンパンだからな…っ♡

ふふ…中でビクビクしてる…♡」



俺の中で穂／香のモ／がビクンビクンと跳ねている…
きっと早く動かしたくて堪らないんだろう



「い、いいよ穂／香…っ 動いて…っ」
「う…うん…っ じゃ…動くなセンパイ…っ」

穂／香ははじめはゆっくりと…

すぐにずっぽっずっぽっとりズミカルに腰を振り始めた

「あっっ ああっっ センパイのっ…中っっ
ケツマンコっ…っ 気持ちいいですっっ」

「ああっ…お、俺もいいよ…っっ
す、すぐ…イッちやいそうぞ」

「いいですよ イッちゃっても…
イッてもピストンは止めませんけど♡」
「そんな…っ ぁあっ…
イ…イッ…♡♡♡」

「ほら…っ センパイっ イッちゃえっ
男のちんぽでイカされちゃえっ」

さっきオモチャで突かれた
奥のスイッチ目掛けてズンズンと突く
その容赦ない突きに俺は
たちどころに絶頂させられてしまう



「うっ💦 いっイクっ💦 あっ…あんんっ💦
んっ…んあぁっ…♡♡♡」

びゅるるっ💦 びゅるるっ💦 と、また射精してしまう
撒き散らされた精液は俺自身の胸から顔にまで飛んだ



「あは♡ センパイのセルフ顔射…っ ゃらしーっ」
「あぁっ…っ んっ…っ またこんなに…出た…っっ」

「ほらセンパイ…
自分で射精したの、飲んで…っっ ほら…っ」

顔に散った精液を指で救って俺の口に注ぐ
もちろんその間もピストンは止めない

「んっ くん…っ ん、美味しい…っ♡♡」
「ふふ、センパイ精液飲むの好きですよーっ
私のも自分のもっ」

「ん…っ でも…やっぱり
穂ノ香の精液の方が美味しいよ…っ」
「やだセンパイ…っ 嬉しい…っ
今日は下のお口にも
たっぷり飲ませてあげますからねっ」



喜びながらピストンを強く早くしていく穂／香
俺もその動きに合わせて穂／香の毛／を締め付けてやる

「穂／香っ…腰振り…上手すぎ…っ♬

穂／香だって…童貞なのに…」

「んっ…センパイのお口で慣れたから…っ♬

あと、オナホでも練習したし…♬

あっオナホもアネちゃん先生に買ってもらいました？

男性のお尻の形のなんてあるんですね♬」

「ああ…♫ どうかしてるな姉ちゃん…♫」





「あと…この身体になる前からずっと…
センパイと…ホモセックス♂したかったから…♂
いつも妄想してました♡♡」

「嬉しくて…ホントは私も
すぐイっちゃいそうなんですよ♂」

「お…俺も…♂
穂ノ香に挿れられたくて…アナル弄ってたから…♂
んっ…嬉しいよ…っ♡♡」

「そうなんだ…っ…♡ 私も嬉しい…♡♡♡
あぁっ…私もっ♡ イキそう…っ♡♡♡」

「いいよ…♡
おっ…俺もまた…イキそうだから…っ♡
今度は一緒に…っ♡♡♡」
「はいっ…♡ イクっ…♡
センパイと一緒にっ…♡♡
イク…っ♡ いっ…イクっ♡♡♡」





ずぱんっ💦と音を立てて腰を打ち付け
穂／香は俺の中で絶頂した

俺の穴の奥に熱い大量の精液を打ち付け…
同時に俺もまた絶頂する

もうさすがに大した量ではないが…

「おおっ💦 中っ…💦 中出しっ…💦
センパイに…中出しっ…しちゃった…♡♡♡」

「ああ…っ♪ 出てるよ…俺の中に…っ♪
んん♪ 穂／香の精液♪
…んっああっ♡♡♡」

繋がったままお互い腰を動かし合って余韻を楽しむ
汗と精液まみれの胸を合わせて
男の身体同士で抱きしめ合う

俺の毛／はもう萎えて情けなく精液を垂らしているが
穂／香の毛／はまだ俺の中で固く反り返って脈動している…



「はぁ…♡ センパイ…も、もう一発…していい？
もっとセンパイに…中出ししたい…♡♡」

「ああ…俺はもう勃たないけど♡
…俺の穴でよかったら…何発でも…♡
穂／香に中出し♡して欲しい♡♡♡」
「センパイ♡♡♡
センパイの穴…ケツマンコ♡がいいです♡」
「んっ…♡ 俺も…穂／香のちんぽがいいよ♡」

俺の中の穂／香のちんぽがびくんと跳ね
また一際太くなった♡

そのままピストンを再開し、夢中で求めあった♡

繋がったまま体位を変えながら
本当に何発も中出しされ…
力尽きた穂／香が仰向けの俺の上に身体を重ねた
汗に濡れた胸板同士を密着させ抱き合う…♡

「んっ…はぁっ♡ こ、こんなに射精したの…
初めてです…っ♡ おちんぼ…ヒリヒリします♡」
「ああ…♡ さすがに俺も…
その、お尻が痛いです…♡」
「ふふ…♡ ごめんなさい♡ でも…センパイのお尻♡
すっごく気持ちよかったです…♡」
「ん…俺も…♡ 穂／香に何度も
中出しして貰えて嬉しかったよ…♡♡♡」

穂／香の身体を抱きながら頭を撫でる

「私も…嬉しいですよ…♡♡♡」

穂／香の上気した顔が近づき…

…俺たちは初めて唇を重ねた…♡

・

・

・

穂／香はすっかり
アナルセックスにハマってしまい…

それからは穂／香が俺を掘るのが
いつもの行為になってしまった。

ウチではもちろん、学校でも毎日のように…。

まあ…俺もそれにハマっているんだけど…

おかげで俺は未だに童貞のままだった。

今日もちろん…



「っおっ いっイクっ またっ…イツちゃうっ♡♡」

俺は五回目の絶頂をして
もう萎えてしまったままのちんぽから
びゅるっ と雀の涙程度の射精をした

「ふふっ はやーいっ
センパイ…もうイキぐせついちゃいました?っ
もう勃起してなくてもイけるんですねっ」



「うっ…うん♪
穂／香のちんぽ♪ 気持ちよすぎて…♪
何度でもイけちゃう…っ♪」

「もうほとんど精液も出てないし…♪
それでももっとイきたいんですよ？♪」
「うん…♪ これ…好きだからっ♪
穂／香のちんぽでっ…♪
ズコズコされるのっ…っ♪」
「ああん♪ センパイエロすぎっ♪
いくらでも突いてあげますっ♡♡♡」



そんな話をしている間もちろん
穂／香のピストンは続いている

その腰使いはすっかり慣れたもので
AV俳優のように力強く余裕すら感じる

「っ…おっ☆ 穂／香もっ…☆

き、気持ちよくっ…なって☆」

「うんっ☆ 私気持ちいいよっ…☆ センパイのお尻…っ☆

ケツマンコっ…っ☆ 最高だもんっ…☆」

「んっ…☆ 嬉しいよ…っ☆ もっ…もう俺の穴っ…☆

穂／香のちんぽ穴だから♡♡」



俺の中を激しく貫く穂／香のちんぽを
タイミングを合わせて尻穴でぎゅっぎゅっ と締め付ける

「んあっっ センパイのお尻っ…っ
ちんぽ握ってくるっ♡♡ もう…っっ
やらしいんだからっっ」

穂／香も嬉しそうにガンガン 俺を突いてくれる

「んっ…っ 手コキやオナホも気持ちいいけど…っっ
やっぱりセンパイのケツマンコでしごいて
センパイの中にどぴゅっっとするの最高…っっ」



「私もお…っこの身体…っ♪
男同士♪じゃないとダメかも♡♡♡」
「うん…俺も♪ 俺も…穂／香のちんぽに
突かれるの…最高っ♪
中出しも…っ…好きっ♪
ホ、ホモセックスっ…♪ 大好きっ♡♡♡」

「ああんっ♪ 嬉しいっ♪
もっ…すぐ出してあげるっ♪
いっぱいっ？ センパイの中…っ♪
種付けっ♪ してあげるからね♡♡♡」
「うんっ♪ 出してっ♪ 俺の中に…っ♪
穂／香の精液っ？ オス汁っ…♪ 吐き出してっ♡♡♡」



「セ…っセンパイ…っ
ああんっ…もうっっ
イっ…いきますよおっ…っ」

今まで増して強くピストンする
パン？パン？と音を立てて俺の中を突き続ける

「あーっ んん…っ イ…イク
も…イクよ、センパイ センパイっセンパイ♡♡♡」
「俺もっ… イクっ …またイクっ 出してっ
穂／香のちんぽ汁でっ イかせてっ♡♡」
「んっい… イ…っ イっ
イクううっ…♡♡ …っ♡♡♡」

どぶんっ💩と俺の中に
塊のような熱い精液が吐き出され…
同時に俺もまた絶頂する

「ぎたっ💩 …せっ精っえ…っ♡♡♡
っく💩 まっ💩 たっ…イク♡♡
っイクう…っうううっ♡♡♡」





「おっ…ほっ センパイのっっ ケツっっ
ケツマンコっっ キュンキュンくるうっ
いっ…っ イってるのにいっ…っ
絞られてっ…っ んひっっ あんっ…んんっ♡♡♡」



俺が締め付けるだけ穂／香も何度も絶頂し
ドクドクと精液を打ち出してくる

俺の萎えた包茎がビクビクと喜び...
ひとしずくだけ薄い精液が滲んだ♡♡♡

何度も絶頂しあい、汗だくになった身体を寄り添わせて
お互いの柔らかくなったちんぽを握り合う
俺をガンガン突き幾度もイかせてくれた穂／香のちんぽは
俺の手の中でくったりと縮んでいる...

とはいえそれでも俺の勃起したときより大きく
もちろん皮だってかぶっていない

「穂／香っ...気持ちよかったよ...穂／香のちんぽ♡♡」

「ん...センパイの☆ ふふ♡ いっぱいいってお疲れですか?♡♡
ほんとにちっちゃ...♡ すっかり皮かぶっちゃって...♡♡♡」

穂／香も縮こまった俺の毛／をぶにぶにと弄ぶ



指先で余った皮をくちゆくちゆと弄り…
ちゅぷと押し込むと包皮の中に指を滑り込ませた

「あは…♡ 入っちゃった♡

センパイのちんぽの中…♡♡♡」

「んあ…っ♡ な、中っ…敏感だから…っ♡」

「不思議なカンジ…♡ ちんぽ犯してるみたい…♡♡♡」

挿れた指先で中の萎んだ亀頭をくりくりと弄り回す

「あっ…あひっ…♡ 穂／香っ…それっ…んあっ♡」



「ふふ…センパイ、乳首もキュンキュン勃ってますよ♡
これ…気持ちいいんですね♡」

「んっ…♡ あ、ああっ…
イ、イツちやいそう…っ♡」
「ぷぷっ♡ あんなにいったのに…
コレでイツちゃうんですかあ？♡
…いいですよ、イツて♡」

指の腹で亀頭の裏側を擦り上げる
まだ残っていた精液とからんで
ちゅくちゅくと音を立てる

「ほら…イツてっ？
私の指で…ほらほら♡ イツちやえ♡♡♡」
「…っく♡ んっ…ああっ♡
イっ…イクっ！ んっ…んんっ♡♡♡」



「っ…ああっ♡ イっ…んあっ♡♡♡」

ビクビクと腰を跳ねさせて絶頂した
もちろんもう精液は一滴も出ないけど…♡



「うふふ♡ すっごい…センパイ
指一本でイッちゃいましたよ?♡」

「あっ…ああ…
穂ノ香にはイカされてばかりだな…
「そんなことはないですよお
私もセンパイのお尻でたっぷり
イかせてもらいましたから♡」
「ん…♡ すごいよ
穂ノ香のちんぽ…♡♡♡」

改めて穂ノ香の
柔らかいちんぽを握り
優しく揉む…

「あん…♡ センパイの手も気持ちいい…♡♡♡」

穂／香も俺のちんぽに挿れている指を
また動かしながら悶える…と

俺の手の中の穂／香のモ／が少し硬くなってくるのを感じた

「ん…穂／香、もう回復してきた？　すごいな…♡」



「ふふふ♡ そうですね…

ウチ帰ったらもう2、3発抜いちゃいます♡」

「はは…♡ オナホとか？」

「オナホよりセンパイの穴の方がいいです♡ から…

最近はお尻のほうメインで…♡」

「ほらこの前センパイに使ったディルドとか♡」

「ああ…♡ 俺のコレじゃあの代わりにはならないからな…♡」

「あはは♡ あ、でも…挿れたいですか？ 私のお尻の穴に…♡」

「そ、そりゃ…挿れたいよ♡」

「じゃあ…こんど？ 挿れてみます？

センパイのこの子♡が固くなったら…♡♡♡」



くりっ？とまた俺の裏筋を指で弄る
穂／香の尻穴に挿れる想像とその刺激だけで
またイってしまいそう…？

「うっうん、挿れたい…」
…お、俺のちんぽじゃ気持ちよくないかもしれないけど…？」
「ふふ そうですね」
…でも私のガバ穴もぜんぜん気持ちよくないかもですよ？？」

ちょっと意地悪そうにそう言いながら
穂／香は俺の包皮の中を擦る

「あっ…ああっ？ ん、そんな…ことないよ…っ？」

というか…すぐに早漏射精させられてしまう想像しかできない
…というか、今またイカされてしまいそうだな

「オナホのほうがマシ、とか
言わないでくださいよ？」
「ああ…っい、言わないっ…
ってというか…イ、イっちゃう…っ」
「いいですよ
ほら…また指一本で…イっちゃえっ♡♡♡」





穂／香の指先に導かれまた絶頂させられてしまう

「っあゝ いっ…いひっゝ んあぁっゝゝゝ」

出し切ったはずの精液がぴゅっと少しだけ進った

「ふふ…あ、ちょっと精液♡出ましたね♡ ほら♡」

俺の精液に濡れた指先を差し出す穂／香…
俺はその指に迷わずしゃぶりつく



「んっ…♡ んちゅっ…♡」
「ふふ♡ ほんとに精液大好きですね♡
センパイ♡♡♡」
「んん…穂／香も…だろ…？♡」
「はい♡ もちろんですっ♡」

穂／香が顔を寄せ
俺の口に舌を差し込む

俺も口中の精液を乗せた舌を
穂／香の舌に絡ませた♡

二人の舌で唾液と精液を絡め合い
穂／香の口に流し込む…



ゆっくり舌の上で味わったあと
こくん♫とそれを飲んだ

「…んふ…♫ 美味しい…です♫」

その口でもう一度、俺にちゅっと口づけして…
穂ノ香はいたずらっぽく微笑んだ



「こんどはセンパイの童貞ちゃんぽで…♡
またホモセックス♡しましょうね♡♡♡」

おしまい♡







